

徳島大学埋蔵文化財調査室所蔵の古人骨資料

端 野 晋 平*

* 徳島大学大学院総合科学研究部

はじめに

2016年5月より、徳島大学埋蔵文化財調査室（以下、調査室と略する）では幸運にも、徳島県・愛媛県などの古墳時代～近世の遺跡から出土した古人骨資料を所蔵することとなった。これらの資料は、もともと本学医学部医学科情報統合医学講座頭微解剖学分野（旧・医学部解剖学第1講座。以下、解剖学分野と略する）が調査し、保管していたものであり、考古学をはじめとする歴史科学、あるいは自然人類学にとって、きわめて学術的価値の高いものである。本稿では、これらの資料の所蔵にいたった経緯、整理作業と保管状況、資料の内容、今後の展望について述べることにする。

1. 所蔵にいたった経緯

今回、所蔵にいたった、そもそものきっかけは、2016年5月24日、徳島県立博物館から調査室に、徳島市鶴島山古墳出土の頭蓋骨の所在と管理者についての問い合わせがあったことに始まる。この資料は以前より、徳島県内の埋蔵文化財関係者のなかで「鶴島山古墳の朱染めの人骨（徳島大学医学部解剖学第1講座所蔵）」として知られたもので、徳島県立博物館では、これを借用のうえ、展示に使用したいとのことであった。そこで、解剖学分野に問い合わせたところ、この資料の所在が確認された。そればかりか、今後、活用する機会がないため、そのほかの古人骨資料と現代人と思われる骨格標本数体分を合わせて、すべて調査室に寄贈したいとの申し出を受けた。これに対し、調査室はこうした古人骨資料の学術的価値の高さと教育や社会での活用の可能性を認め、喜んで受け入れることとした。

2016年5月26日、解剖学分野より寄贈を受け、借用希望資料の確認とあわせて、資料の整理作業を開始した。その結果、鶴島山古墳出土の人骨は数体分、確認されたが、徳島県立博物館が借用を希望する「朱染めの人骨」を含む、状態の良い頭蓋骨3体分は見当たらなかった。そこで、解剖学分野の古人骨資料の多くを、調査・報告された山田正興名誉教授に、この資料の保管場所について、お伺いしたところ、退職後に奈良県立医科大学第一解剖学講座に寄贈したとのご教示を得た。同講座に問い合わせた結果、古人骨資料の所在が確認され、同資料のほかに、徳島県内遺跡出土の頭蓋骨数体分もあわせて、7月25日、調査室が寄贈を受けた。



図1 古人骨の保管状況

2. 整理作業と保管状況

寄贈された資料の整理作業は、筆者の監督のもと、調査室技術補佐員・久米淑子を中心となって実施し、岸本多美子・前田千夏がこれを助けた。

寄贈資料は、解剖学分野所蔵時、スチールキャビネットや段ボール箱、木箱などに収納されていた。整理作業は、こうした収納容器から資料を取り出し、内容の確認から始まった。資料の多くは、クリーニングを終えた状態で、遺跡・遺構・人骨番号・人骨部位・日付などの情報を記したラベルとともに、ビニール袋などに小分けにして収められていた。土の付着した資料については、竹串や筆などを用いて、クリーニングを行った。そのうえで、小分け容器が傷んだり、容器自体がなかったりしたものについては新たに用意したビニール袋に収納し、もともとのまともりごとに袋番号を付与した。袋には、人骨に関する情報を記したラベルを新たに作成し、同封した（図 1-1）。これらの小分け袋は、ゼネラル社製・イージーキャビネット（引出し内寸法：幅 390 × 深さ 295 × 奥行 565 mm）に収納した（図 1-2）。これは紙製で、通気性があり、内部に湿気がこもりにくく、カビの発生を抑制することから、古人骨資料の保管に適している。資料検索の便宜のため、収納箱ごとに番号を付け、遺跡名などの

表 1 所蔵古人骨一覧（2016 年 11 月現在）

No.	遺跡名	所在地	時期	埋葬形式	個体数	遺跡文献	人骨文献	朱文献	備考
1	海原古墳	徳島県美馬市美馬町西荒川89-2	古墳後期（6世紀後半）	横穴式石室	3	2	19	-	6世紀後半をややさかのぼる可能性あり
2	庄・蔵本遺跡2次	徳島県徳島市庄町1丁目78-1	平安中期（11世紀前葉）	木棺墓	1	9	17	-	保存状態不良
3	庄・蔵本遺跡10次	徳島県徳島市蔵本町3丁目18-15	江戸中期（18世紀）	木棺墓	1	11	-	-	歯牙のみ
4	常三島遺跡3・5次	徳島県徳島市南常三島町2-1	江戸前期（17世紀）	火葬墓	1	10	13	-	
5	谷口山古墳	徳島県鳴門市大麻町桧35	古墳中期（5世紀）	箱形石棺	1	6	19・20	-	
6	鶴島山古墳群	徳島県徳島市西須賀町鶴島	古墳中期（5世紀）	箱形石棺	8	4	5・16・19・21	14・23	朱付着個体あり
7	天神山古墳	徳島市八万町犬山248-1	古墳中期（5世紀）	箱形石棺	1	8	-	-	朱あり
8	恵解山古墳群	徳島県徳島市八万町中津浦	古墳中期（5世紀前半）	箱形石棺	1	7	19・20	-	
9	韓崇山古墳群	徳島県板野郡板野町犬伏平山	古墳中期（5世紀前半）	箱形石棺	1	12・22	22	4・23	朱あり
10	小山田1号箱式石棺	愛媛県北条市才之原・庄	古墳中期（5世紀）	箱形石棺	1	1	18・19	-	頭蓋骨は奈良医大が保管。朱あり
11	小山田支群	愛媛県北条市才之原・庄	古墳後期（6世紀後半～末）	横穴式石室	7～9	1	18・19	-	1号墳の頭蓋骨Yは奈良医大が保管
12	東山蔭が森古墳群	愛媛県松山市東石井町乙70	古墳終末期（7世紀初頭）	横穴式石室	6	15	-	-	歯牙のみ

* 1・2・5～12が寄贈資料。

** 文献番号は表 2 に対応。

情報とともに記したラベルを表に貼り付けた（図 1-3）。現在、これらの収納箱は、徳島大学埋蔵文化財調査室の収蔵庫に設置されている（図 1-4）。なお、整理した結果は、データベース化（Microsoft Excel）して、調査室所有の NAS（ネットワークハードディスク）に保存している。これによって、所蔵古人骨の詳細な内容を簡便に検索できる。

3. 古人骨資料の内容

現在、調査室が所蔵している古人骨は表 1 の通りである。出土地を県別にみると、徳島県の遺跡出土資料が 18 体分、愛媛県のそれが 14 ～ 16 体分ある。所属時期は、古墳時代中期・後期・終末期、平安時代中期、江戸時代前期・中期と幅広い。こうした時代幅の広さに関係して、埋葬形式は箱形石棺・横穴式石室・木棺墓・火葬墓と様々である。このうち、古墳時代中期の箱形石棺出土資料には朱が付着した個体も含まれる。常三島遺跡 3・5 次調査出土の火葬骨はいちど、整理作業を担当した九州大学に保管を委ねたが、今回の寄贈を機に返却され、調査室が保管することとなった。

資料が得られた経緯や出土状況などの考古学的情報を把握するため、ラベルなどに記載された情報を手がかりに、遺跡の発掘調査報告を探索した。その結果、探し出されたものが表中の「遺跡文献」である。遺跡の所在地や時代、埋葬形式などの情報はここから得られたものである。合わせて、古人

表2 所蔵古人骨関連文献リスト

No.	文献情報
1	愛媛県埋蔵文化財調査センター, 1990. 小山田Ⅱ遺跡・小山田支群 サンセットヒルズカントリークラブ鹿島建設に伴う発掘調査報告書. 愛媛県埋蔵文化財調査センター, 松山.
2	岡山真知子・大塚一志, 1988. 海原古墳調査報告. 徳島県博物館紀要 19, 25-51.
3	河野摩耶・南武志・今津節生, 2012. 前方後円墳発生期における朱の交易ーイオウ同位体比分析による産地推定をとおしてー. 古代学研究 196, 33-36.
4	元興寺文化財研究所考古学研究室, 1979. 徳島市鶴島山古墳群の調査. 元興寺文化財研究所, 奈良.
5	清家章, 2001. 畿内周辺における箱形石棺の型式と集団. 古代学研究152, 1-18.
6	立花博, 1970. 鳴門市大麻町谷口山の組立式箱形石棺と徳島県内の組立式箱形石棺について. 徳島県博物館紀要 1, 20-32.
7	徳島県教育委員会, 1966. 眉山周辺の古墳 恵解山古墳群 節句山古墳群. 徳島県教育委員会, 徳島.
8	徳島県教育委員会・徳島市教育委員会, 1972. 大山古墳群天神山古墳緊急発掘調査概報. 徳島県教育委員会・徳島市教育委員会, 徳島.
9	徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室, 2005. 庄（庄・蔵本）遺跡ー徳島大学蔵本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書ー. 徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
10	徳島大学埋蔵文化財調査委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室, 1997. 徳島市常三島遺跡埋蔵文化財発掘調査実績報告書 工学部光応用工学科棟. 徳島大学埋蔵文化財調査委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
11	徳島大学埋蔵文化財調査室, 1998. 庄・蔵本遺跡1ー徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査ー. 徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
12	徳島縣, 1929. カンゾウ山石棺. 徳島縣（編）, 徳島縣史蹟名勝天然記念物調査報告第1輯. 徳島縣, 徳島. pp.18-21.
13	端野晋平・米元史織, 2016. 常三島遺跡の近世火葬墓. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 2, 37-51.
14	松原博・原田寛子, 1979. 鶴島古墳2号石棺内の赤色顔料. 元興寺文化財研究所（編）, 徳島市鶴島山古墳群の調査. 元興寺文化財研究所, 奈良. pp.44-45.
15	松山市教育委員会, 1981. 東山蔭が森古墳群調査報告書. 松山市教育委員会, 松山.
16	山田正興, 1979. 鶴島山古墳群の人骨について. 元興寺文化財研究所（編）, 徳島市鶴島山古墳群の調査. 元興寺文化財研究所, 奈良. pp.36-43.
17	山田正興, 2005. 人骨. 徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室（編）, 庄（庄・蔵本）遺跡ー徳島大学蔵本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書ー. 徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島. p.36.
18	山田正興・山本明良, 1990. 愛媛県北条市小山田1号箱式石棺と小山田1号墳人骨の所見. 愛媛県埋蔵文化財調査センター（編）, 小山田Ⅱ遺跡・小山田支群サンセットヒルズカントリークラブ鹿島建設に伴う発掘調査報告書. 愛媛県埋蔵文化財調査センター, 松山. pp.161-166.
19	山田正和, 1993. 四国出土頭骨の古人類学的研究. 奈良医学雑誌 44(3), 168-184.
20	Fujimori,K.,Chikamori,K.,Matsubara,H.,Miyai,M.,Okino,S.,Amoh,T.,Yamada,M., 1979. Human bones from three burial mounds in Tokushima. Tokushima Journal of Experimental Medicine 26(3-4), 73-79.
21	Yamada,M.,Fujimori,K.,Takeuchi,H.,Matsubara,H.,Horibe,H.,Chikamori,K.,Mima,S.,Hanaoka,K.,Inui,M.,Yamamoto,K.,Imai,K.,Maeiwa,M.,Harada,H.,Tokunaga,I.,Suzue,T.,Shono,M., 1978. Report on the human bones excavated the from tsurushima burial monund in tokushima. Tokushima Journal of Experimental Medicine 25(1), 1-17.
22	Yamada,M.,Ishimura,K.,Araki,T.,Takeuchi,H.,Maeiwa,M.,Tokunaga,I.,Yamamoto,J.,Tohno,Y.,Tohno,S.,Minami,T.,Utsumi,M.,Watanabe,S.,Moriwake,Y.,Shono,M.,Toyota,B.,Kawano,Y., 1996. Ancient human bones with mercuric cosmetics excavated from the burial mound of Kanzo-yama in Tokushima. 奈良医学雑誌 47(1), 88-96.
23	Yamada,M.,Minami,T.,Yamada,G.,Tohno,Y.,Tohno,S.,Ikeda,Y.,Tashiro,T.,Kohno,Y.,Kawakami,K., 1997. Different element ratios of red cosmetics excavated from ancient burials of Japan. Science of the Total Environment 199(3), 293-298.

骨資料自体の報告、これを用いた学術論文についても探索した。人骨の性別・年齢、計測項目、非計測項目などに関する報告、およびそれらにもとづいた論文をまとめて「人骨文献」、付着した朱に関する自然科学的分析を行った論文を「朱文献」と表に示している。詳細はそれぞれの文献を参照されたい(表2)。そのほか、徳島県・愛媛県・香川県の遺跡から出土したとみられる資料がいくつかあるが、発掘記録が見当たらず、由来が不明という理由でここには示していない。こうした資料についても今後、発掘記録が判明次第、一覧表に追加したい。

4. 今後の展望

以上、今回の古人骨資料の所蔵にいたった経緯、整理作業と保管状況、資料の内容について述べた。最後に、研究・教育・社会貢献それぞれの場での、これらの資料の活用に向けて、今後の展望について述べたい。

遺跡から出土した人骨は、過去の人びとの生業、社会、文化、習慣などに関わる情報を秘めている。こうした情報を自然人類学的方法によって解読していこうとするアプローチ、「骨考古学」が提唱されて久しい(片山1990)。性別、年齢、身長、顔立ちや体つき、疾患歴、妊娠の有無、血縁関係、受傷痕跡、生活環境、埋葬年代など、古人骨がもつ豊富な情報が、考古学・歴史学分野に大きく貢献するのは、近年の骨考古学の研究成果をみても間違いない。所蔵資料は、考古学・歴史学上の様々な課題に対してアプローチできる潜在力を秘めたものであり、今後の活用が期待される。

古人骨の門外漢である筆者がすぐ思いつく研究活動として、炭素14年代測定の実施がある。所蔵資料は、年代測定の試料となり得るほど、状態の良いものがそろっている。にもかかわらず、これまでに年代測定が実施されたのは、常三島遺跡3・5次調査例の1体にとどまっている(加速器分析研究所2017)。資料の所属時期は、共伴遺物などの考古学的情報から導いたものであるが、その検証は十分といえるのであろうか。もちろん、とにかく測ればよいという態度は、炭素14年代測定が破壊分析である以上、正しくない。しかし、年代測定の実施は、破壊による損失を補ってなお余りある成果をもたらすものと期待される。たとえば、海原古墳例のように、後世の攪乱を受けたものもあり、年代測定によって、人骨の所属年代を検証する必要がある。また、古墳時代中期の箱形石棺は、年代決定の決め手となる共伴遺物が乏しい場合が多いことから、そこから出土した人骨を年代測定する意義はいつそう大きくなる。こうした理由により今後、年代測定を積極的に推し進める価値は十分にあると考える。



図2 古人骨の展示状況(1)



図3 古人骨の展示状況(2)

教育・社会貢献の場での活用については、すでに実践しつつある。その一つが、平成28年度徳島大学埋蔵文化財調査室ミニ展示「墓が語る過去の社会と文化」(期間:2016年9月7日～11月30日、場所:徳島大学附属図書館本館・資料展示室)である。この展示では、所蔵古人骨のうち、鶴島山古墳と常三島遺跡から出土した資料を取り上げ、被葬者の性別・年齢、埋葬の方法がどうであったのかなどを、市民・学生に分かりやすく伝えるよう試みた(図2)。もう一つは、徳島県立博物館平成28年度特別陳列「古代

の彩り 徳島の朱」(期間:2016年12月3日～12月25日)への資料の貸出である(図3)。これは、今回の古人骨資料寄贈のきっかけとなった鶴島山古墳出土人骨を含む展示であり、貴重な資料の存在を市民に周知する良い機会となった。

このように、教育・社会貢献の場での活用は、一步踏み出したところである。今後、こうした活動をより良く展開していくには、効果的な展示方法を考案したり、展示に限らず、市民講座やワークショップなどの様々な方式を試行したりする必要がある。また、古人骨を用いることによって、教育や社会に内在する、どのような問題を解決するのか、といった目的意識の明確化も求められる。これには、約3000体の古人骨資料を所蔵する九州大学総合研究博物館での実践例が参考となる。たとえば、古人骨の展示において、頭蓋骨の設置角度を調整することによって、展示者の意図を見学者が捉えやすくする工夫が示されている(舟橋2011)。また、子どもがもつ、骨に対する恐怖心やネガティブな先入観(科学概念と衝突し、学習の妨げになる)が、実物標本を用いたワークショップにより、乗り越えられた事例も紹介されている(藤野ほか2012)。こうした先例を手本としつつ、さらに自らのアイデアを積極的に盛り込むことで、古人骨資料の活用の可能性を広げていくことが、今後の調査室に課せられた使命である。

謝 辞

まず今回、寄贈された古人骨を精力的に調査・研究され、筆者からの問い合わせに対して丁寧にご回答いただいた山田正興先生(徳島大学名誉教授)、古人骨資料をご寄贈いただいた鶴尾吉宏先生(徳島大学大学院医歯薬学研究部)、西真弓先生(奈良県立医科大学第一解剖学講座)に深謝の意を表したい。また、寄贈のきっかけを与えてくれた岡本治代氏(徳島県立博物館)、古人骨出土遺跡の文献についてご教示いただいた栗林誠治氏(徳島県埋蔵文化財センター)、古人骨資料の保管・修復についてご教示いただいた米元史織氏(九州大学総合研究博物館)に感謝申し上げたい。

文 献

片山一道, 1990. 古人骨は語る—骨考古学ことはじめ. 同朋舎, 京都.

(株) 加速器分析研究所, 2017. 常三島遺跡第3・5次調査における放射性炭素年代測定. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 3, 127-131.

藤野理香・田中あかり・坂倉真衣・三島美佐子, 2012. 骨格標本に対するネガティブな先入観を乗り越え—ワークショップ・プログラム「九大博物館を探索骨から分かることをおしゃべりしながら考えよう!」の事例から—. 九州大学総合研究博物館研究報告 10, 51-62.

舟橋京子, 2011. 古人骨展示に関する小論. 九州大学総合研究博物館研究報告 9, 1-8.